

エドウィン・アーノルドと近代日本⁽¹⁾

—和訳と八巻本詩作品集他についての補足—

金 沢 篤

はじめに

書誌学的研究の辛いところは、書いたり発表したりする傍ら未見の資料によって自らの短見に気づかされることがしょっちゅうだという点だろうか。それが全くの未見の資料の場合は、まだいいのだが、見ていた筈にもかかわらず（気づいていてもよかった筈なのに）、うっかり看過してしまった場合（愚かなことを言ってしまった場合）が、いっとう辛いものがある。その時は潔く自らの不明を認め、謝罪と訂正を果敢に行うしかない。だが、こういう教訓を得た後では、自分の従事している作業が、恒に不確かなものであり、恒に修正すべき未完成のものであり、そのさ中での如何なる発信も所詮は中間報告に過ぎないのだ、との強固な自覚が必要だということである。したがって常に心掛けるべきことは、自身が依拠している資料を可能な限り明確に示してゆく必要があるということであろう。

「近代日本に於けるインド学仏教学の成立と展開—その書誌学的、文献学的研究—」という観点から、金沢 [2012a]、「エドウィン・アーノルドの『アジアの光』を読む」を書いた直後に、自身の短見に気づいた。いくつかの資料を改めて審及した結果、誤記・誤植訂正⁽²⁾をかねて、直ちに続稿を認めることにした。書誌学的研究のある意味では宿命みたいなものであるが、自身の作業の粗相を深く反省している。

I. エドウィン・アーノルドの来日・滞日

本稿は、金沢 [2012a] の訂正・補遺を目指したもののだが、『アジアの光』The Light of Asia の詩人として知られるエドウィン・アーノルド Edwin Arnold と近代日本がどのように関わったかを、より広い視点から再論するものでもあるので、その前提として、筆者が金沢 [2012a] で確認できた、エドウィン・アーノルドの来日・滞日の時日を改めて引いておきたい。

岡部昌幸 [2004a] の「解説」中の岡部氏の

「アーノルドが日本に滞在したのは、一八八九年から一八九一年の一月までの一四ヶ月と、娘のキャサリンと一度イギリスに帰国後、再び単身でアメリカを経由して翌一八九二年三月から夏まで滞在した四ヶ月の合計約一年半である・・・」(250 頁)

と、長谷川洋二 [1997] の

「翌年 [= 1889 年：筆者註]、・・・卿は [= エドウィン・アーノルド：筆者註]、・・・横浜に到着、・・・ハーンを乗せたアビシニア号入港に五ヶ月先立つ十一月五日のことであった。」(34 頁)

の二者を踏まえて、金沢 [2012a] の時点で、筆者が得ていたアーノルドの滞日情報は、1879 年『アジアの光』を刊行したエドウィン・アーノルドは、1889 年 [明治 22 年] 11 月 5 日来日、1891 年 [明治 24 年] 11 月離日、1892 年 [明治 25 年] 3 月再来日、夏までの四ヶ月滞在した

というものである。残念ながら、筆者には、アーノルドの二度の来日・離日の 4 時日のうち、初来日の時日が「1889 年 11 月 5 日」として明確になっているばかりである。

Ⅱ. エドウィン・アーノルドと近代日本

A. 『アジアの光』の和訳について

筆者は、エドウィン・アーノルドの『アジアの光』に関して、「筆者が知る限り、それに対する和訳刊本は以下の 5 種類であろう」(262 頁)と先の論攷、金沢 [2012a] の中では記した。だが、その「5 種類」は以下の「6 種類」に改める必要がある。筆者が 3 番目の、最初の完全和訳本としたのは、以下の(4)であったが、前稿脱稿後直ちに、それが以下の(3)の改装再刊本であることが判明したのである。つまり、目にしていた筈にもかかわらず、なぜかその(3)をスルーしてしまっていた。前稿執筆中は、それが自身が、気かけ、探究していた、エドウィン・アーノルドの重要な和訳本の書名であることを、なぜか迂闊にも自覚しなかったのである。以下の(3)の『大聖釋尊⁽³⁾』こそ、前稿の(3)にして以下の(4)たる『大聖釋迦牟尼佛』の初刊本の書名であったのである。書名が「大聖釋尊」から「大聖釋迦牟尼佛」に変わり、発行所が「佛教圖書出版協會」から「興文館」に変わり、判型や頁構成等の装釘が変わった。頁構成は変わったものの、訳文などには基本的には変化はなく、実質同一の和訳と言

えるが、序文中の自身を名指す書名までもがその書名の変更に合わせて変えられていることに注目すべきである。

詮方ない繰り返すように聞こえるかも知れないが、つまり以下の(4)を手にって見る限り、それが(3)の改装再刊本であると気づかせるものは何一つないのである。また、先の論攷でも触れたが、筆者が執筆時に手にしていたのは、下記の(4)の初刷ではなしに第3刷であった。その巻末に附録のようにして収録されていた、その(4)『大聖釋迦牟尼佛』の各誌各紙のレビューを先の論攷の附篇2として付し、それが刊行された際のその受容の一端を筆者は紹介したのであった。筆者としては、「第3刷であったればの特典」と単純に理解したのである。だが、前稿執筆時既に自身のパソコン中に取得してあった(4)の初刷本(PDF)を子細に検分しておくべきであった。なんと、(4)の初刷本の巻末にも第3刷本と同じ各誌各紙のレビューが掲載されていたのである。なんとレビューの中の書名も＜変更が加えられて＞『大聖釋迦牟尼佛』となっている。初刷が、自らのレビュー（書評）を本巻中に収録している不思議にこそ、端から気づくべきであったのである。さらに、前稿の【略号・参考文献】でもそのままに記しておいた、(4)収録の各種「序文の日付」（＝1908年）が、(4)の初刷の発行日（＝1911年）と大きくかけ離れている事に注目すべきであった。その二点からして、その(4)がオリジナル本ではないことに筆者は直ちに気づくべきだったのである。しかも、既にそうした著作権法などが厳しく確立を見ていない時代の出版事情にある程度通じていた筈の筆者であった⁽⁴⁾にもかかわらずである。この事実に気づいた時、筆者はいつものように大いに悔いたのであったが、後の祭りである。ならば直ちに修正すべきと考えたのが、今回の続編の執筆動機である。

-----『アジアの光』刊行（1879）-----

-----アーノルド爵位を得る（1888）-----

-----アーノルド来日（1889-1891;1892）-----

(1)『亞細亞之光輝 第壹卷⁽⁵⁾』中川太郎（部分訳）[18900418]興教書院

(2)『亞細亞週光』木村亮吉（全和訳⁽⁶⁾）[18900609]木村亮吉発行

-----加藤熊一郎著『大聖釋迦』[18910922]加藤熊一郎発行-----

-----アーノルド離日（1891.11;1892 夏）-----

-----アーノルド没（1904）-----

- (3)『大聖釋尊』 中川太郎・濱口恵璋・狩野廣崖 [1908] 佛教圖書出版協會
- (4)『大聖釋迦牟尼佛（原名 亞細亞の光）』 中川・濱口・狩野 [1911] 興文館
- (5)『亞細亞の光』 島村菱三 [1940] 岩波文庫
- (6)『亞細亞の光』 山本晃紹 [1944] 目黒書店

例えば上記(3)に収録された濱口 [1908a] と(4)に収録された濱口 [1908b] の両者を比べてみる。同一の文が同じ日付と同じ署名の下に展開されていて両者の違いなど眼に入らない。誰であれ、簡単に見過ごしにしようかも知れないが、実は中身が微妙に違っているのである。

濱口 [1908b] には、「久しく筐底に蔵せしが頃日文明堂主人之を上梓せんことを懇請せらるゝに遭ひ烏澁がましくもこれを諾したり。」とあるところ、濱口 [1908a] には、「久しく筐底に蔵せしが頃日文明堂主人等、佛教圖書出版協會を設立し、その第一回紀年出版として鉛槧に附せんことを懇請せらるゝに遭ひ烏澁がましくもこれを諾したり。」(3 頁) とあったのである。両者に現れる「文明堂主人」の方はともかくとしても、「佛教圖書出版協會」とは、(3)の発行者／発行所の名称である。一方、(4)のそれは、興文館。筆者はこの策略にまんまと引っかかってしまったのである。濱口 [1908a] の収録されている(3)、すなわち中川・濱口・狩野 [1908] の書名は『大聖釋尊』、濱口 [1908b] の収録されている中川・濱口・狩野 [1911] の書名は、『大聖釋迦牟尼佛 原名 亞細亞の光』、そしてその書名に合わせてか、題的な表現もすべてそれに合わせて修正されている。『大聖釋尊』がすべて『大聖釋迦牟尼佛』に変えられ、「大聖釋尊序」とあったものがすべて「大聖釋迦牟尼佛序」と変えられているのである。これらは書物としてのアイデンティティを保持するためには不可欠の作業の結果と言えるが、やはり要注意である。

B. アーノルドの八巻本詩作品集について

金沢 [2012a] を「むすびにかえて：8 卷 eight books と 8 冊 eight volumes」という紛らわしいタイトルの論及で結んだ筆者である。1879 年に刊行された問題のエドウィン・アーノルドの『アジアの光』とは、8 卷／8 篇／8 章 eight books からなるブッダの生涯を綴った「ブランク形式からなる」長編詩であること、そしてその長編詩を含むエドウィン・アーノルドの詩作品をまとめた 8 巻本の／8 冊 eight volumes からなるアーノルド詩作品集が 1888 年に刊行され

たと記す研究者の記述のあることを確認し、その現物を実見することのないまま、その記述の内実に迫ろうとする企てであったが、金沢 [2012a] 脱稿後、インターネット上の古書散策の中で、1888 年刊行の七巻本アーノルド詩作品 [全] 集に逢着し、直ちに発注して、それを入手した結果の考証が、本節を為す。金沢 [2012a] を未読の読者には意味不明となろうかと考えるので、煩瑣を顧みず、その「むすびにかえて」の要点を以下に引用しよう。

「・・・・・・・・＜前略＞・・・・・・・・」

『アジアの光』の 5 番目の和訳本である山本 [1944] の巻頭部に置かれた訳者自身による「解説」には、以下のような奇妙に興味深い記述があるのである。「一 原著者略傳」として、

「かくして、彼はその生涯の重要な部分を一新聞記者として過しはしたが、詩人としての天稟は裕かであつた様で、その作品は詩集八巻の中に収まつてゐる。」(2 頁)

・・・・・・・・＜中略＞・・・・・・・・

その一方で、アーノルドに関しても日本語で最も突っ込んだ知見を与えてくれた長谷川 [1998] には、

「三年後に辞して帰国するとともに、当時「世界最大の発行部数」を誇った『デイリー・テレグラフ』にはいり、一八七三年にはその主筆の地位についた。『アジアの光』を世に送ったのはその六年後であり、八巻本の詩集が出版された一八八八年には、文筆での功によって、「インド帝国ナイト爵」に列せられたのである。」(金沢 [2012a] 34 頁)

いかが。信頼できそうな長谷川洋二氏の記述の中にも「八巻本の詩集」が登場し、それが 1888 年に「出版された」とあるのである。1888 年に出版された「八巻本の詩集」とは何か。この「八巻本」をやはり“eight volumes”と、「詩集」を“poetical works”とコメントすれば、先の山本 [1944] の「解説」の記述と会通するように思われる。

筆者の手元に鶯色のハードカバーの表紙に金色の＜蓮華＞と＜OM!＞がデザインされた Arnold [1887] がある。撫で回したいような素敵な書物であるが、むろん 1888 年以前の刊行物であるから、「サー」の付いていないエドウィン・アーノルド名義である。Lotus and Jewel『蓮華と宝石』と題されたいくつ

かの詩作品から成る、いわば詩集であるが、その巻末に、刊行元の英国トリュブナー社からそれまでに刊行されているエドウィン・アーノルドの書物の宣伝が掲載されていて興味尽きないものがある。むろんその最初の頁には最新刊の Lotus and Jewel が、そしてそこから溯って The Light of Asia に到る書物のリストである。そしてその次の頁には、**Uniform Edition of Edwin Arnold's Poetical Works** の宣伝が挙がっている。**In Six Volumes,.... Sold only in Sets.** として、(1) The Light of Asia (2) Indian Poetry (3) Pearls of the Faith (4) Indian Idylls (5) The Secret of Death (6) The Songs Celestial とある。これはいわば、1887 年以前に出版されたアーノルドの「六巻本の詩集」であろう。これに例えば、1887 年新刊の Lotus and Jewel の一卷を追加したら、1888 年には「七巻本の詩集」が出版され得るように思われる。筆者の現在の願いとは、1888 年に「出版された」という、もしかしたら長谷川洋二氏が所蔵しているかも知れないアーノルドのその「八巻本の詩集」の現物に遭遇することであるが、近い将来、果たして叶うだろうか。」（金沢 [2012a] 283-284 頁）

いかが。筆者が、拘っているのは、長谷川 [1998] の「八巻本の詩集が出版された一八八八年には、文筆での功によって、「インド帝国ナイト爵」に列せられた」との文言である。

アーノルドが 1888 年に、「ナイト爵に列せられた」のは、事実であるし、筆者未見のアーノルドの「八巻本の詩集が出版された」のも、もしかしたら 1888 年であるかも知れない。だが、筆者には、その長谷川氏の記述が、「八巻本の詩集が出版されたのを期に、アーノルドが、ナイト爵に列せられた」との誤解を生むのではないかと危惧があるのである。そしてその「八巻本の詩集」とは何か。それは、金沢 [2012a] で使用した筆者の引用を踏まえて言うならば、Uniform Edition of Edwin Arnold's Poetical Works (In Eight Volumes) のことに過ぎないのである。大切なのは、言うまでもなく Uniform Edition という文言である。アーノルドの 8 冊の詩作品本が同一の規格で同一の装釘の下で刊行されての「八巻本の詩集＝八巻本の詩作品〔全〕集」であろう。アーノルドには、八巻本どころか、それに先だって、七巻本の詩作品〔全〕集もあれば、六巻本の詩作品〔全〕集もあるのである。1887 年に刊行されたアーノルドの新著の末尾の広告頁には、六巻本の詩作品〔全〕集が、1888 年に刊行された新著、アーノルドの『英国ものないし非オリエンタル詩作品集』、Arnold [1888b] の末

尾の広告頁には、七巻本の詩作品〔全〕集が、そして、例えば筆者の所蔵する 1892 年の刊行と記される、アーノルドの *Death and Afterwards* (1887) の第 13 版の末尾の広告頁には、八巻本の詩作品〔全〕集が、以下のように広告されているのである。

“Sir Edwin Arnold’s **Oriental Poetry**.

UNIFORM EDITION.

The following **Eight Volumes** may be had, **uniform in size and binding**, price £2, 8s.

Sold only in Sets.

[1] THE LIGHT OF ASIA;

OR, THE GREAT RENUNCIATION.

[2] INDIAN POETRY:

THE INDIAN SONG OF SONGS, &c.

[3] PEARLES OF THE FAITH;

OR, ISLAM’S ROSARY.

[4] INDIAN IDYLLS,

FROM THE SANSKRIT.

[5] THE SECRET OF DEATH,

FROM THE SANSKRIT.

[6] THE SONG CELESTIAL;

OR, BHAGAVADGĪTĀ. From the Sanskrit.

[7] LOTUS AND JEWEL,

WITH TRANSLATIONS FROM THE SANSKRIT.

[8] WITH SA’DI IN THE GARDEN;

OR, THE BOOK OF LOVE.

For description of the separate volumes, see previous pages.

LONDON: KEGAN PAUL, TRENCH, TRÜBNER, & CO. L^{TD}” (p.22)

これを文字通りに解するならば、八巻本《サー・エドウィン・アーノルドのオリエンタル詩作品集》（分売不可）ということになるだろうか。巻番号は便宜上筆者が付したのだが、その最後の第 8 巻の刊行年は 1888 年である。この全八巻本詩作品集がお目見えしたのがいつかを特定し得ないが、第 8 巻の刊行

された 1888 年以降であるとは言えるのである。筆者としては、1889 年のことではないか、と言いたいのだが、残念ながら、そう言い切る資料に乏しい。もしかしたら、第 8 巻に相当する【8】が刊行された 1888 年のうちに、それを取り込んだ八巻本詩作品〔全〕集もお目見えしたのかも知れない。長谷川氏が「八巻本の詩集が出版された一八八八年」と言及しているのであるから、氏は、何かに明確な根拠に基づいているものと想像されるが、果たして真相はどうか。六巻本や七巻本ではない「八巻本の詩集」だけが、敢えて言及されているのは、それが、アーノルドの「詩作品集」の最終形であることにもよるのかも知れない⁽⁷⁾が、もしかしたら、エドウィン・アーノルドの伝記⁽⁸⁾の一つの定番とみなされる、Smith & Lee[1920]、すなわち The Dictionary of National Biography... の記述に“A collection of his poetical works came out in 1888.”(p.60) とあることによるのではないかと、筆者は想像を逞しくしたのである。この記述は、アーノルドの詩作品集が、初めて 1888 年に刊行されたと告げていると解す他ないものである。すなわち、この『英国伝記事典』は、1888 年に先立って、既に何度もアーノルドの「詩作品集」が刊行されている事実を看過しているのである。長谷川氏の論述の中に、アーノルドのまとめた「詩作品集」の刊行と「ナイト爵」の授与の間にながしかの因果関係を読み込もうとする傾向を筆者としてはつい見てしまう。だが、それは明らかに違う。しかも、先に見た通り、八巻本の詩作品〔全〕集は、アーノルドの単なる詩作品〔全〕集ではなかった。細かい差異であるが、そこには、“Oriental” オリエンタルという限定辞が付されているのである。それに先立つ、1888 年には、既に刊行されているのが確実である《七巻本サー・エドウィン・アーノルド詩作品〔全〕集》との違いを看過すべきではないのである。このことは、アーノルドの著作のほとんどを初刊していた「東洋もの」の出版で名高い、ロンドンのトリュブナー社 Trübner & Co. の運命と深く関わったものと言える。英国ヴィクトリア時代の重要な出版社の盛衰を論じた Howsam[1998] の以下の一連の記述に注目したい。

“Kegan Paul, Trench, Trübner & Co. Ltd.:the result of the 1889 merger of
 ・ Trübner & Co.(owned and managed by Nicholas Trübner from 1851 until his death in 1884 and subsequently owned by his heirs and managed by Frederick Duffing)
 ・ Kegan Paul, Trench & Co.(owned and managed by Charles Kegan Paul and Alfred Chenevix Trench, since 1877)

・ Redway & Co.(owned by George Redway and Alfred Sinnett; managed by Redway since ca 1882)”(p.139)

“On 14 November 1889, Kegan Paul, Trench & Company was sold to the newly created firm of Kegan Paul, Trench, Trübner & Company Limited.”(pp.139-140)

“The Trübner part of the name came from the largest of the three lists now being amalgamated, namely the very large ‘oriental’ publisher, the late Nicholas Trübner, who specialized in books about India and Asia, and titles on Indian and Asian languages and cultures.”(p.2)

“It was in October 1891 that the company duly moved out of Redway’s ‘library in York Street’, Kegan Paul, Trench’s offices in Paternoster Square, and the old Trübner headquarters in Ludgate Hill, to its own new building. Named Paternoster House, it stood in Charing Cross Road at the corner of Cecil Court.”(p.151)

筆者が、これまで問題にしてきたアーノルドの詩作品〔全集〕は、1888年の年号と結びついているのが確実な七巻本アーノルド詩作品〔全〕集に至るまでは、東洋（インド&アジア）ものの出版の老舗トリュブナー社からのものであった。ところが、筆者が現在確認している八巻本サー・エドウィン・アーノルド・オリエンタル詩作品〔全〕集は、三つの出版社が併合されて出来た新出版社ケーガン・ポール、トレンチ、アンド・トリュブナー社から刊行されたArnold[1892]の巻末広告の中に確認することが出来るのである。1888年に従来通りの八巻本アーノルド詩作品〔全〕集がトリュブナー社から刊行されたかは不明、筆者としては残念ながら未だ確認出来ていないのである。

筆者は先に引いた金沢[2012a]の「むすびにかえて」を「これに例えば、1887年新刊のLotus and Jewelの一卷を追加したら、1888年には「七巻本の詩集」が出版され得るように思われる」などの文言で結んだのであるが、先にも触れた通り、前稿脱稿後、筆者が入手した1888年刊行の「七巻本アーノルド詩作品〔全〕集」が、Arnold[1888a]である。金文字入り金の蓮華の図案入りの黄土色のハードカバー。背表紙上部に“Sir Edwin Arnold’s Poetical Works”、中部に各巻のタイトル（例えば、The Light of Asia）、下部に出版社の“Trübner & Co.”の金文字が打たれている。各巻の巻番号はどこにも印刷されていないが、たぶん第1巻に相当するThe Light of Asiaの場合だと、扉中部には、Sir Edwin Arnold, M.A., K.C.I.E., C.S.I.の著者名、扉下部には、Londonの文字と“Trübner

& Co, Ludgate Hill” の出版社名と刊行年の 1888 が印刷されている。その巻末の宣伝広告の頁には、

“UNIFORM EDITION OF

SIR EDWIN ARNOLD’S POETICAL WORKS.

In Seven Volumes, crown 8vo, **uniformly bound in cloth**,

price £2, 2s. **Sold only in Sets.**

[1] THE LIGHT OF ASIA;

OR, THE GREAT RENUNCIATION.

[2] INDIAN POETRY:

THE INDIAN SONG OF SONGS, &c.

[3] PEARLES OF THE FAITH;

OR, ISLAM’S ROSARY.

[4] INDIAN IDYLLS,

FROM THE SANSKRIT.

[5] THE SECRET OF DEATH,

FROM THE SANSKRIT.

[6] THE SONG CELESTIAL;

OR, BHAGAVADGĪTĀ. From the Sanskrit.

[7] LOTUS AND JEWEL,

WITH TRANSLATIONS FROM THE SANSKRIT.

For description of the separate volumes, see previous pages.

LONDON: TRÜBNER, & CO. LUDGATE HILL.”(p.9)

とあるのである。アーノルドが爵位を得たのが **1888 年の何月か**は依然として不明ながらも、先に筆者が危惧を表明した、八卷本詩作品 [全] 集とアーノルドの「ナイト爵」の相関関係のないことが、1888 年の刊行年を持つこの七卷本詩作品 [全] 集が、既に「サー・エドウィン・アーノルド詩作品 [全] 集」と名づけられていることから明らかであろう⁽⁹⁾。この後、1888 年のある時期に第 8 巻目に相当する WITH SA’DI IN THE GARDEN; OR, THE BOOK OF LOVE. が刊行され、その後直ちに 1888 年のうちに、同じトリュブナー社から、八卷本のサー・エドウィン・アーノルド詩作品 [全] 集が刊行された可能性もない

とは言えないが、七巻本を購入した者が再び八巻本を購入するものであろうか。このアーノルドの詩作品〔全〕集というものは、われわれ日本人が通常著作集や全集に対して抱くものとは異なっていると思うべきであろう。分売不可と謳っている以上、同一年に、相次いで七巻本詩作品〔全〕集と八巻本詩作品〔全〕集を刊行するものであろうか。常識的に考えるなら、1888年に七巻本詩作品〔全〕集が、刊行されたのなら、八巻本の刊行は、少し時間をおいて、1889年以降になされるのではないかと想像されるのである。そして、今の場合、先にも見た出版社の統合と移転が1889年に起こっている。その実情は現段階では何とも窮めがたいのであるが、1888年にサー・エドウィン・アーノルドの詩作品〔全〕集が刊行された可能性はむしろ低いのではないか、というのが、筆者の想像である。

例えば、上記七巻本詩作品〔全〕集の第4巻に相当する Indian Idylls 『インド田園詩集』と題されたサーヴィトリ物語やナラ王物語を含む一冊がある。先の The Light of Asia の巻と同体裁のものだが、扉には、刊行年の記載がない。巻末宣伝広告の部分には、やはり同じ七巻本詩作品〔全〕集の広告が掲載されている。そして筆者の手元には、それとは宣伝広告の頁に至るまで全く中身は同じだが、表紙の装釘だけが異なる、刊行年の不明なもう一冊の本がある。背表紙の上部に、ただ Indian Idylls、その下に Arnold、そして背表紙下部には、Paul, Trench, Trübner & Co. との金文字の入った、蓮華の図案のかわりに、金色のガネーシャの図案の入った、ベージュ色のハードカバーの一冊である。前者は1888年に刊行された七巻本サー・エドウィン・アーノルド詩作品〔全〕集の一冊、後者は、出版社が統合された1889年以降の新会社から刊行された一冊の単行本としてのものである。個々の出版に関しては、あれこれ想像をたくましくする他ないように思われる。真相は、簡単にはうかがい知れないのである。

現在、このアーノルドの詩作品集は揃いではなかなか入手困難である。わが国の大学図書館で、筆者が所蔵している七巻本アーノルド詩作品集でさえ所蔵しているところはないようである（むろん八巻本アーノルド詩作品集も）。

【アーノルドの八巻本詩作品集についての附論】

あれこれ呻吟してやっと原稿を書き上げ、印刷所にファイルを送付して帰宅すると、なんと驚き。少し前に気になって発注していた Arnold[1888c] が届い

ていた。すなわち、八巻本アーノルド詩作品集の第8巻を為す筈の1888年にトリュブナー社から初刊されたアーノルドの詩作品【8】 WITH SA'DI IN THE GARDEN; OR, THE BOOK OF LOVE である。赤いクロス装、金文字と表紙に銀色のペルシャ風寺院が図案化された素敵な一冊。背表紙は上部に With Sa'di in the Garden、その下に著者名の Sir Edwin Arnold、下部に出版社名の Trübner & Co. の金文字が。予期した通りの期待の本であったが、唯一意外だったのは、刊行年が初刊の1888年であったにも拘わらず、初版ではなく、第3版であったことである。そして、驚くべきは、巻末附録の＜ SIR EDWIN ARNOLD'S WORKS ＞と題された、24頁に亘る宣伝広告の部分である。その最後に近い21頁は、以下のような広告で占められていたのである。重複を厭わずに全体をそのまま掲げたい。

“Sir Edwin Arnold's **Poetical Works**

UNIFORM EDITION.

The following **Volumes** may be had, **uniform in size and binding**, price £2, 8s. Sold only in Sets.

【1】 THE LIGHT OF ASIA;

OR, THE GREAT RENUNCIATION.

【2】 INDIAN POETRY:

THE INDIAN SONG OF SONGS, &c.

【3】 PEARLES OF THE FAITH;

OR, ISLAM'S ROSARY.

【4】 INDIAN IDYLLS,

FROM THE SANSKRIT.

【5】 THE SECRET OF DEATH,

FROM THE SANSKRIT.

【6】 THE SONG CELESTIAL;

OR, BHAGAVADGĪTĀ. From the Sanskrit.

【7】 LOTUS AND JEWEL,

WITH TRANSLATIONS FROM THE SANSKRIT.

【8】 WITH SA'DI IN THE GARDEN;

OR, THE BOOK OF LOVE.

For description of the separate volumes, see previous pages.

LONDON: TRÜBNER, & CO., LUDGATE HILL.” (p.21)

いかが。筆者が手元の限られた資料に基づいて、常識的につい先頃「1888年のある時期に第8巻目に相当する WITH SA'DI IN THE GARDEN; OR, THE BOOK OF LOVE. が刊行され、その後直ちに1888年のうちに、同じトリュブナー社から、八巻本のサー・エドウィン・アーノルド詩作品〔全〕集が刊行された可能性もないとは言えない」と記したばかりの事態が、現に起こったらしいことが、この広告で裏付けられたのである。巻番号は当然ながら筆者が便宜的に振ったものである。“The following Volumes”とあって、“The Eight Volumes”とはなっていないものの、実質「八巻本サー・エドウィン・アーノルド詩作品〔全〕集」と呼び得るものが、1888年の年号と共に、英国ロンドンに出現したと言い得るのである。最新刊の第8巻は、筆者の手元にある赤い独自の装釘本に加えて、詩作品〔全〕集の第8巻に組み込み得る「金文字入り金の蓮華の図案入りの黄土色のハードカバー。背表紙上部に“Sir Edwin Arnold's Poetical Works”、中部に各巻のタイトル（With Sa'di in the Garden）、下部に出版社の“Trübner & Co.”の金文字が打たれている」装釘本も1888年のうちに刊行されたと言えるのである。これもそれも、エドウィン・アーノルドが、「インド帝国ナイト爵」に列せられたからこそ実現した快挙であることは言うまでもないであろう。

C. アーノルドの著作などの和訳について

◎山田孝道とアーノルド

金沢〔2012a〕では【略号・参考文献】に名前の山田孝道とその山田〔1900〕だけを掲げておいたのだが、脱稿後その初刷本を実見するに及んで、その年号の〔1900〕も誤りで、正しくは山田〔1899〕とすべきものであったことも判明した⁽¹⁰⁾。その山田孝道に関しては、金沢〔2012b〕では、忽滑谷快天との関わりで、「〔1914年：筆者註〕当時曹洞宗大学の教頭であった」（223頁）と記し、その脚註5には、「後出の『和融誌』第18巻などの編集&発行者でもある」と記したのであった。禅の専門家たちには大部の『禪宗辞典』の編纂者として名高いのかも知れない。また、正木晃氏によって「驚くべきことに、『鉄鼠の檻』には、少なくとも私が現時点で諒解している「禅」について、ほぼ完全に

描き出されている⁽¹¹⁾」と絶賛される、京極夏彦氏の大作『鉄鼠の檻』の読者には、以下の一節で馴染みの実在する歴史上の人物である。

「京極堂はその何とか云う古い本の下に持っていたもう一冊の本を出した。

「これは、この『瀉山警策』を平易に講述したもので『瀉山警策講義』と云う本だ。著者は山田孝道」

「それがどうした」

「この本は明治三十九年 [= 1906 年：筆者註] の発行だよ」

「は？」

「だから、この中には計り知れない程古い旧典もあれば、ずっと下って明治の活字本までである云うことだよ。これなんか高高五十年程前の本だ」

「つまり何だ、その」

「少なくとも四十七年前まではこの蔵は書庫として機能していたと云うことだよ」

「・・・」（京極 [2001] 179 頁）

明治時代の曹洞宗について要領よく記した横關了胤 [1933] には、山田孝道の名前は、「曹洞宗の学者」として、有名な原坦山や忽滑谷快天の名前と並んで、次のように登場する。著書の数に関して言えば相当なもので、原坦山や忽滑谷快天の比ではないようである。

「尚明治時代を通じて活動した人物を挙げると宗政家に瀧谷琢宗、石川素童、栗山泰音、弘津説三、上野舜穎の諸師があり、学者に原坦山、辻顕高、忽滑谷快天、山田孝道の諸師あり布教家に新井石禅、松浦百英の諸師あり、・・・」（395 頁）

より詳しくは、井上泰岳 [1917] の説明を以下に引こう。

「師は東京市牛込区原町、曹洞宗大龍寺住職。湖南と号す。文久三年八月一日を以て島根県能義郡廣瀬町に生る。明治十一年五月同県能義郡澤村地福寺前住影山虚巖師に就て得度す。明治九年九月より十一年八月まで廣瀬町修文館にて漢学を修む、十一年九月より十四年三月まで摂津蘆津黙應に就て宗学、漢学

を修む、十四年八月曹洞宗専門支校卒業、十八年三月曹洞宗大学林卒業、二十四年四月慶應義塾卒業、二十五年九月より二十八年八月まで英人サンマー氏の家塾及早稲田専門学校に通学英語並に文学を研究す。明治十八年五月島根県能義郡澤村地福寺に住職、同年九月より二十年四月まで島根県曹洞宗専門支校教頭を勤む、二十九年四月より三十二年四月まで曹洞宗第五中学林長兼教頭勤務、三十二年五月より三十三年八月まで及三十五年九月より三十六年十二月まで曹洞宗高等中学林長兼教頭勤務、明治三十七年一月より現に曹洞宗大学教頭たり、『菜根譚講義』『禅林香語集』禅書の通俗講義書類数十種あり。」(590-591 頁)

その山田孝道が、本稿で何故に問題となるのかと言え、その山田 [1899] の中には、次の興味深い一節が見られるからである。

「釈迦牟尼佛の傳記を書きました者が澤山有りますけれども、近い処では「釈迦譜要略」と云ふ者が御座います。其中を拝覽致しましても其のお生れなされた時の様子は、とても吾々の辯説では説き盡されぬ位な廣大無辺な者で御座います。又私の知己である当今英国第一流の詩伯エドウィン・アーノルドと云ふ人は倫敦の「毎日電報」と云ふ新聞の主筆を勤て居られますが、此の人が長らく印度に居られましたところから、先年釈尊の傳記を書いて夫れが為めに世界に高名を得て、とうゝ英吉利の貴族にまで成つた人で有りますが、其人の「亜細亜の光」といふ者を見ましても中々広大な者で御座います。」(23 頁)

筆者が目下関心を寄せる『アジアの光』の詩人エドウィン・アーノルドを「私の知己」と明言する日本人がいたことに脚光を浴びせたいがためである。しかも、その山田孝道は筆者が現在所属する駒澤大学とも深い関わりのある曹洞宗の僧侶である。「知己」と言うからには、山田孝道は、個人的にエドウィン・アーノルドと何らかの交流を持つ者であろう。この「緒言」からは、前稿、金沢 [2012a] で紹介した山邊習學などの過誤⁽¹²⁾からは解放されて、『アジアの光』の刊行 (1879) ⇨ 爵位授与 (1888) という時間的推移は正しく理解されていることが明白である。さらに、山田孝道の別の著作、山田 [1915] には、次の一節が見られる。

「しかるに現今西洋崇拜者は、祖先禮拜の如きは、東洋の舊習であるといつ

て、一概に排斥する者があるが、是れは大に誤つて居る。西洋人でも能く心得た者は、決して他國の美風を損ずるやうなことを致さぬ。余が知己であつた、英國の詩伯エドウィン、アーノルド氏は、佛教篤信者であつた⁽¹³⁾からでもあるが、日本の貧富隔絶が比較的甚しからず、皇室と臣民、家長と子女奴婢との間が親密平和であるのは、佛教の感化で、祖先の靈牌を禮拜するといふ美風が最も影響して居るといつて、深く感服して居た。」(76 頁)

近代日本の黎明期に来日滞日し、その主著などを通じてわが国にも数々の事蹟を残しているサー・エドウィン・アーノルドであるが、以上の駒澤大学ゆかりの山田孝道が個人的にそのアーノルドの知己を得ていたことに加え、その氏が、エドウィン・アーノルドの別の著作の和訳者であったことも、ほとんど知られてはいないのである。アーノルドの 1887 年刊行の小著⁽¹⁴⁾ *Death and Afterwards* の全和訳たる『死及死後』、山田 [1891] の表紙の次の〈遊び紙〉のオモテ面には、貴重なことに、アーノルドの以下のような文面が肉筆のままに刷り込まれている。

“Azavu
Wendsday
Dear Sir,
I am much
interested in your
translation of my
little book, I shall
be happy to help you
if I can
In very truly
Edwin Arnold”

【麻布／水曜日／拝啓／わたしはわたしの小著に対するあなたの翻訳を歓迎します。もしわたしに出来ることがありましたら、喜んでお手伝いさせていただきます。／敬具／エドウィン・アーノルド】（拙訳）

この滞日中のアーノルドから訳者の山田孝道に宛てての私信の意味は、以下

に引く訳者山田孝道自身の「緒言」を俟って、初めて明らかになるように思われる。この訳本、山田[1891]の発行日は、その奥付によれば、1891年[明治24年]12月30日。そして以下に見る通り、和訳者山田孝道による「緒言」の日付は、明治24年10月となっている。その「緒言」の中身に注目したい。

「緒言」

一 余嘗て本書の説を聞き竊かに以爲く宗教哲學に關して頗る益する所あらんと熟讀之を譯述し世に公にせんと欲するの念止む能はず京濱の諸肆に就て本書を索めたるも遂に獲る能はざりき其後明治廿三年本書の著者アーノルド氏の來朝に際し面晤を請ふて之を謀る氏大に余の志を嘉みし恵むに一本を以てし且つ余か本書の質疑に應ずることを諾せられたり然るに余當時事あり譯述に従ふ能はず遷延の間氏も亦本國に歸れり因て慶應義塾教頭門野幾之進氏等に就き質疑を請ひ遂に成功を得るに至りたり

一 本書の所説中往々余の見解に異る所あり従て之を信する能はざるもの少なからずと雖も本書は理化動植天文地理等諸種科學より確證を援引し心理哲學宗教等の原理に據りて論述したるものなれば立論援證の法は極めて其當を得たるものなり故に余か之を譯述して世に公にする所以の者は敢て世人をして本書の所説を以て最上無比の眞理と信認せしめんと欲するにあらず只眞理に達するの一針路と爲さしめんとするのみ特に世の宗教哲學を談する者をして其立論援證一に本書の如くならしめんことを期するのみ

一 本編は務めて原書の文意を損せんことを恐れ敢て辭句文章を修飾せず只最も解し難き處に限り少しく語句を増減せるのみ故に或は隔靴の憾あるを免れざる所あるを保せず

一 本編中に記する所の——は人名＝＝は地名「」は物名『』は援引語《》は本書の假設語（）は譯者注解の符號なり

一 原書の文章は極めて優麗微妙にして且つ光彩燦然殆と人目を眩するの觀あり而して本編は粗糙拙劣復た觀るへからず金玉を瓦礫となし錦綺を襤褸となすの譏は固より余の甘受する所なり

明治廿四年十月 譯述者識

この山田[1891]の奥付の日付は、アーノルドの第一回目の離日とされる「1891年11月」と調和的である。山田孝道訳『死及死後』は、原著者のアー

ノルドの最初の滞日中には残念ながら刊行されなかった。だが、そのことを記す訳者山田孝道による上に見た「緒言」の日付は、「明治24年〔1891年〕10月」であり、それを文字通りに受け取ると、その「緒言」中に「**余當時事あり譯述に従ふ能はず遷延の間氏も亦本國に歸れり**」とあることをどう受け止めたらよいのだろうか。エドウィン・アーノルドの最初の来日の際の「離日の時日」が、1891年11月ではなく、1891年10月以前と考えるべきということになる。いずれが真相だろうか。エドウィン・アーノルドの最初の離日は、1891年（明治24年）の何月何日のことと考えればよいのであろうか。今後に明確にすべき課題として、ここにその問題点だけを指摘しておきたい。

◎外山義文⁽¹⁵⁾とアーノルド

近代日本のインド学・仏教学の成立にも大きく寄与した英国人エドウィン・アーノルドの講演や著作の和訳は、今日に至るまであれこれ成されているが、『印度佛蹟興復に関する意見』と題された、外山義文〔18920713〕の存在は意外に知られていないのではないかと。既に、インターネット上でそのPDFの全文を閲覧出来るのであるから、ここで、改めて引くことをしないが、その本文一頁目の書名の脇に記された以下の「断り書き」の一文にだけは一瞥をくれておきたい。そこにはこう記されているのである。

「明治二十五年六月二十六日印度佛蹟興復會有志者の招請に應じ東京芝區愛宕町萬年山青松寺に於て英國大詩人サー、エドウィン、アーノルド氏の爲されたる印度佛蹟興復に關する演説筆記」

なんと、エドウィン・アーノルドは、その滞日中、やはり駒澤大学の歴史と深く関わりを持つ東京芝愛宕町の曹洞宗萬年山青松寺でインドの佛蹟興復についての講演会を行っているのである。講演は当然ながら英語で行われた筈で、その講演録が、みごとに和訳されて、刊行されていたのである。その講演会の開催された「明治25年(1892年)6月26日」からは、その講演会は、エドウィン・アーノルドの二度目の来日中のことと想像されるが、アーノルドの二度目の来日・滞日の時日に関して、より具体的なデータが追加されたと見るべきである。すなわちアーノルドは二度目の来日に際して、少なくとも明治25年(1892年)6月26日までは滞在していた。そしてさらに穿った見方をするな

らば、その講演の和訳冊子の刊行された「明治25年(1892年)7月13日」にも、まだ滞日していたと言い得るのかも知れない。この点を闡明することも、今後の課題と言うべきであろう。

◎その他：さらなるアーノルド考の補足に向けて

駒澤大学の教授を勤めた増永靈鳳氏の『仏教読本』、増永[1956]の「第四課 さいりの日」には、思いがけずアーノルドの名前と共に、以下のような一節を見出すことが出来る。

「詩人アーノルドは「アジアの光」という長編の詩を作って、仏陀の生涯を詠っている。その中に次のような句がある。

されば、仏陀は威徳ある、
 悲智円満の城砦（じょうさい）に、
 心固めて妖魔等に、
 謀り犯さる事もなく⁽¹⁶⁾、
 いとも寂靜（しずか）に坐したまう。
 御座覆（みくらおおい）いし菩提樹の、
 一木の下は吹き荒（すさ）む、
 騒擾（さわぎ）に障（さ）えて露の珠（たま）、
 貫きとめし茂り葉に、
 月影のせて閃（ひらめ）くは、
 夜来の風雨菩提樹の、
 拡（ひろ）がる影の外（そとも）のみ、
 侵せし故と伝えたり。」（53-54頁）⁽¹⁷⁾

典拠などが一切記されていないので、すわ、増永靈鳳氏自身による和訳かと思われたが、やはりさにあらず。中川太郎・濱口恵璋・狩野廣崖[1908][1911]からの引用であった（仮名遣いは新仮名に改めてある）。やはり『アジアの光』の和訳中、最も普及したのは、この三番目、四番目のこの全訳本と言えるのかもしれない。

近代日本におけるインド学仏教学の成立にも大きく関与したエドウィン・アーノルドとその主著『アジアの光』であるが、佛陀釋尊の、悟りの件りを読

んだこの一節の原テキストを引き、併せ、島村訳と山本訳を引いて改めて味読しつつ、結論を要しない、前稿、金沢 [2012a] の補遺としての本稿をひとまず結ぶこととしたい。

増永霊鳳は「佛陀釋尊の生涯」を綴った長い長い詩篇の中から、どうして、この部分に注目したのであろうか。

“But Buddh heeded not,
Sitting serene, with perfect virtue walled
As is a stronghold by its gates and ramps;
Also the Sacred Tree — the Bôdhi-tree —
Amid that tumult stirred not, but each leaf
Glistened as still as when on moonlit eves
No zephyr spills the gathering gems of dew;
For all this clamor raged outside the shade
Spread by those cloistered stems:” (Arnold[1890a]p.170)

「されど佛は心にも
掛けず、さながら、城砦（じょうさい）を門と壁との
囲むごとく完（まつた）き徳に護られて心静かに坐（ざ）し給ふ。
かの清浄（しやうじやう）の菩提樹（ぼだいじゅ）もその騒乱（さうらん）のただ中に
戦（そよ）ぎだにせず、その葉皆煌めきわたり、
月の夜に輝く露の珠玉（しゅぎよく）をば零（こぼ）す程なる
そよ風も無きが如くに静かにて、
此の凄じき物音も大樹（だいじゅ）の幹に囲まれし
蔭の外（と）にのみ荒れ狂ふ。」（島村 [1940]204 頁）

「されど、佛陀は眼もくれず、
寂然、端座まします、
徳相円満、壁とはなれる、
門や斜壁の、城に壁を成すがごと。
又、聖樹—菩提樹は—

そが騒擾（さわぎ）が中に擾ぎもせずして、
 葉鱗はいちいちに光る、燦く様は、
 月の夜に、風だにたゞで、群る露玉（つゆ）の
 乱れもせぬごと。そも、なべて
 これらの叫声（こゑ）は、たゞ、大樹（き）の根の柱の
 囲める葉陰の外にて狂ひけるのみ。」（山本 [1944]359-360 頁）

【略号・参考文献（増補・抄）】

Almond, Philip C.

[1988]: *The British Discovery of Buddhism*, Cambridge.

Arnold, Edwin <1832-1904>

[1879]: *The Light of Asia or the Great Renunciation (Mahābhini-shkramana) Being the Life and Teaching of Gautama...*, Trübner & Co.: London.

[1887]: *Lotus and Jewel...*, Trübner & Co., Ludgate Hill: London.

[1888a]: *Sir Edwin Arnold's Poetical Works*, 7 Volumes, Trübner & Co., Ludgate Hill: London. <Sir Edwin Arnold>

[1888b]: *Selected Poems National & Non-oriental*, Trübner & Co., Ludgate Hill: London. <Sir Edwin Arnold>

[1888c]: *With Sa'di in the Garden or The Book of Love...* <3rd Ed.>, Trübner & Co., Ludgate Hill: London. <Sir Edwin Arnold>

[1890a]: *The Light of Asia or the great Reninciation (Mahābhinishkramana) Being the Life and Teaching of Gautama...*, The Lotus Series, Vol.IV, Kegan Paul, Trench, Trübner, & Co., Ltd.: London. <Sir Edwin Arnold>

[1890b]: *The Light of Asia*, Chicago & New York. <Sir Edwin Arnold>

[1891a]: *The Light of Asia or the Great Renunciation (Mahābhinishkramana) Being the Life and Teaching of Gautama...*, Bernhard Tauchnitz: Leipzig. <Sir Edwin Arnold>

[1891b]: *The Light of the World or the Great Cosumption*, Heinemann and Balestier: Leipzig [Limited, London]. <Sir Edwin Arnold> → Arnold [1891a] (in One Volume)

[1891c]: *Seas and Lands*, Longmans, Green, and Co.: London. <Sir Edwin Arnold>

[1891d]: *Japonica, with Illustrations by Robert Blum*, Charles Scribner's Sons: New York. <Sir Edwin Arnold>

[1892]: *Death and Afterwards* <13th Ed.>, Kegan Paul, Trench, Trübner, & Co., Ltd.: London. <Sir Edwin Arnold> [1st Ed.: 1887]

Chamberlain, Basil Hall

[1890/1898]: *Things Japanese, Being Notes on various Subjects Connected with Japan...*, London. Howsam, Leslie

[1998]: Kegan Paul, *A Victorian Imprint: Publishers, Books and Cultural History*, London &

Toront.

Miner, Earl

[1958]: *The Japanese tradition in British and American Literature*, Princeton.

Smith, George & Lee, Sidney

[1912/1920]: *The Dictionary of National Biography; Second Supplement 1901-1911*, Oxford.

Spiro, Melford E.

[1976]: “Introduction<California, December 1975>” → Arnold[1976]

Tweed, Thomas A.

[1992]: *The American Encounter With Buddhism, 1844-1912: Victorian Culture & the Limits of Dissent*, Indiana University Press: Bloomington.

Welbon, Guy Richard

[1968]: *The Buddhist Nirvāṇa and its Western Interpreters*, Chicago and London.

Wright, Brooks

[1957]: *Interpreter of Buddhism to the West: Sir Edwin Arnold*, New York.

アーノルド

[1891]: 「歐州今日の理學及び開化」 → 佐々木 [1891]

オルコット

[1891]: 「日本の同胞に所懐を告ぐ」 → 佐々木 [1891]

栗屋利江

[2010]: 「近代から現代へ」『新アジア仏教史 02 インドⅡ 仏教の形成と展開』佼成出版社

井上泰岳

[1917]: 編『現代佛教家人名辞典』現代佛教家人名辞典刊行會

井上哲次郎

[1908]: 「大聖釋尊序」 → 中川・濱口・狩野 [1908]

[(1908)]: 「大聖釋迦牟尼佛序」 → 中川・濱口・狩野 [1911]

[1941]: 著『修正 人格と修養』廣文堂書店

[1943]: 著『懷旧録』春秋社松柏館

井上哲次郎・堀謙徳

[1911]: 著『増訂 釋迦牟尼傳』前川文榮閣

内田晃融

[1933]: 「布哇と米國の開教一特に本派本願寺の開教に就て一」『現代佛教』第105号
大西忠雄

[1970]: 「小泉八雲と仏教」『へるん』第9号 八雲会

大屋徳城

[1917]: 著『世界三聖傳 釈迦』松本商會出版部

岡部昌幸

[2004a]: 訳『アーノルド ヤポニカ<新異國叢書 第三輯8>』（サー・E・アーノル

ド著）雄松堂

[2004b]: 「エドウィン・アーノルドとハーナー二人のジャポニザンをめぐるエクリプス」『国文学—解釈と教材の研究—』第49巻第11号 學燈社

加藤咄堂（熊一郎）

[1891]: 著『大聖釋迦』加藤熊一郎発行⁽¹⁸⁾

門野幾之進

[1891]: 「死及死後序」→山田 [1892]

金沢篤

[2006]: 「ラメレス訳『カーマ・スートラ』の変遷—『印度愛経文献考』周覧(3)—」『駒大佛教學部論集』第37号

[2012a]: 「エドウィン・アーノルドの『アジアの光』を読む」『インド論理学研究』第5号

[2012b]: 「忽滑谷快天ノート(1) —欧米巡錫の実情—」『駒大禪研究所年報』第24号

木村善堯 <1894- >

[1928]: 著『佛陀』甲子社書房

木村善之

[1935]: 著『佛陀』甲子社書房

木村亮吉

[18900609]: 訳『亞細亞之光』（エドウィン・サー・アーノルド著）木村京極夏彦

[2001]: 著『文庫版 鉄鼠の檻⁽¹⁹⁾』講談社文庫

厨川白村 <1880-1923>

[1922]: 著『英詩選釋 第一巻』アルス

[1933]: 著『英詩選釋』改造文庫

佐々木亨

[1891]: 編『佛教新演説』明昇堂

佐藤巖英

[1917]: 『佛教新講演 全』興教書院

島村蓼三 <1884-1952>

[1940]: 訳『亞細亞之光』岩波文庫

下田正弘

[2006]: 「近代仏教学の展開とアジア認識—他者としての仏教」『岩波講座「帝国」日本の学知 第3巻: 東洋学の磁場』岩波書店

[2010]: 「近代仏教学の形成と展開」『新アジア仏教史 02 インドⅡ 仏教の形成と展開』佼成出版社

鈴木重信

[1922]: 訳『佛陀の生涯と思想』（ピッシェル原著）新光社

関田かをる

[1999]: 著『小泉八雲と早稲田大学』恒文社

高楠順次郎

[1890]: 「サー、エドウキン、アーノルド氏略傳」→中川 [1890]

[1908]: 「大聖釋尊序」→中川・濱口・狩野 [1908]

[(1908)]: 「大聖釋迦牟尼佛序」→中川・濱口・狩野 [1911]

[1911]: 「サー、エドウキン、アーノルド氏略傳」→中川・濱口・狩野 [1911]

[1934]: 著『東方の光としての佛教』大雄閣

[1937]: 「序」→南條 [1937]

[(1942)]: 「序」→山本 [1944]

高梨健吉

[1969]: 訳『日本事物誌 1』（バジル・ホール・チェンバレン著）東洋文庫 131 平凡社

竹内信夫

[1991a]: 「ハーン「ニルヴァーナ」について」『国文学解釈と観賞』第 56 卷 11 号 至文堂

[1991b]: 「異文化への眼差し—ウィリアム・ジョウンズ、ウジェーヌ・ビュルヌフ、ラフカディオ・ハーンをつなぐもの—」『比較文学研究』第 60 号 恒文社

田中泰賢

[2000]: 「エドウィン・アーノルド (Edwin Arnold, 1832~1904) の詩作品『アジアの光り』(The Light of Asia) について」『愛知学院大学教養部紀要: 愛知学院大学論叢』48 (1) (通号 127) 11-30 頁

塚本善隆

[1957]: 編『(増訂版) 望月仏教大辞典』全十巻 世界聖典刊行協会

築島謙三

[1964/1977/1984]: 著『増補 ラフカディオ・ハーンの日本観』頸草書房

十一谷義三郎・三宅幾三郎

[1931]: 共訳『東西文學評論』（ラフカディオ・ヘルン著）岩波文庫

常光浩然

[1964]: 編『日本佛教渡来史』佛教タイムス社内佛教出版局

[1969]: 著『明治の仏教者 下』春秋社

徳重浅吉

[1933]: 「明治佛教研究資料論」『日本文化と佛教』大東出版社

外山義文

[18920713⁽²⁰⁾]: 訳『印度佛蹟興復に関する意見』（サー・エドウキン・アーノルド氏）鴻盟社

遠田勝

[1984]: 訳『評伝ラフカディオ・ハーン』（E・スティーヴンソン著）恒文社

長井真琴

[1931]: 著『佛教と人生』大雄閣

中川太郎

[18900418]: 訳『亞細亞之光輝 第壹巻』興教書院

中川太郎・濱口恵璋・狩野廣崖

[19081019]: 共訳『大聖釋尊』（エドウィン・アーノルド著）佛教図書出版協會

[19111211]: 共訳『大聖釋迦牟尼佛 原名 亞細亞の光』興文館

中村元

[1995]: 「東京大学仏教青年会の活動—その歴史と展望—」『仏教文化』第32号・第33号

南條文雄

[1937]: 著『懷旧録』大雄閣

西村六郎

[1991]: 「特派員としてのハーニー来日の事情とその成果—」『国文学解釈と観賞』第56巻11号 至文堂

幣原道太郎

[19610401]: 「第十九世紀英文学と東洋—特にエドウィン・アーノルドに就いて—」『学苑』第254号 [昭和女子大学 光葉会]

長谷川洋二

[1996a]: 「エドウィン・アーノルド卿とハーニー (一)」『へるん』33号

[1996b]: 「E・アーノルド宛書簡 (二通)」『へるん』33号

[1997]: 「エドウィン・アーノルド卿とハーニー (二)」『へるん』34号

[1998]: 「エドウィン・アーノルド卿とハーニー (三)」『へるん』35号

濱口恵璋

[1908a]: 「大聖釋尊序」→中川・濱口・狩野 [1908]

[1908b]: 「大聖釋牟尼佛自序」→中川・濱口・狩野 [1911]

林雅彦

[1991]: 「地獄絵と出会う日まで—ハーニーの日本仏教の見聞—」『国文学解釈と観賞』第56巻11号 至文堂

平井程一

[1940]: 訳『骨董』（ラフカディオ・ヘルン作）岩波文庫

平川祐弘

[1994]: 編『世界の中のラフカディオ・ハーニー』河出書房新社

平川祐弘・牧野陽子

[2009]: 編『講座小泉八雲 I ハーニーの人と周辺』新曜社

深瀬基寛・村上至孝・大浦幸男

[1959]: 訳『西洋文学の日本発見』（E・マイナー著）筑摩書房→Miner [1958]

前嶋信次

[1951]: 「一史話—高楠順次郎」①～④『大法輪』第18巻第7～10号

前田専学

[1993a]: 「ラフカディオ・ハーニーと仏教—ヘルン文庫からみた」『雲藤義道先生喜寿記念論文集 宗教的真理と現代』教育新潮社

[1993b]: 「ラフカディオ・ハーニーの仏教理解と日本の仏教」『東方』第9号

- [1997a]: 「ラフカディオ・ハーンとヒンドゥー教」『東方學會創立五十周年記念 東方學論集』
- [1997b]: 「公開講演 小泉八雲の仏教観」『駒大佛教学部論集』第28号
- [2005]: 「来日前のラフカディオ・ハーンとヒンドゥー教—ハーン著『エドウィン・アーノルドの新著—』」『長崎法潤博士古稀記念論集 仏教とジャイナ教』平楽寺書店
- [2009a]: 「ハーンとアーノルド—来日前のハーンによる諸作品を中心に—」→平川・牧野 [2009]
- [2009b]: 「小泉八雲の仏教観」→平川・牧野 [2009]
- 正木晃
- [2001]: 「解説—宗教体験は人を殺すか」→京極 [2001]
- 真崎義博
- [1994]: 訳『さまよう魂—ラフカディオ・ハーンの遍歴』（ジョナサン・コット著）春秋社
- 増永靈鳳
- [1956]: 著『佛教読本』誠信書房
- 松岡譲 <1891-1969>
- [1935]: 著『釋尊の生涯—仏伝と仏伝文学—』大東出版社
- 丸谷哲勝
- [1962]: 「The light of Asia についての一考察—何故大衆に競い読まれたか」『龍谷大学論集』（通号 371）1962.12
- 水野弘元
- [1971]: 著『釈尊の生涯』春秋社
- 南方熊楠
- [1987]: 著『南方熊楠日記 1 1885-1896』八坂書房
- 村井文夫
- [2009]: 「日本の仏教とハーン」『講座小泉八雲 I ハーンの人と周辺』新曜社
- 山縣五十雄
- [1905/1906]: 註釈『英詩研究』言文社
- 山口栄鉄
- [2010]: 著『英人日本人学者チェンバレンの研究—<欧文日本学>より観た再評価』沖積舎
- 山田孝道 <1863-1923->
- [1891/1230⁽²¹⁾]: 訳『死及死後』（エドウィン・アーノルド著）哲学書院
- [1899]: 著『佛教のすゝめ』光融館
- [1915]: 著『悟道録』弘学館書店
- 山邊習學
- [1941]: 著『佛教の新體制』第一書房
- 山本晃紹 <1898-1976>
- [1944]: 訳『亞細亞の光』目黒書店

[1951]: 著『僧房日記』岡崎屋書店

横關了胤

[1933]: 「明治時代の曹洞宗」『現代仏教』第105号

渡邊海旭

[1918]: 著『欧米の佛教』丙午出版社

（本稿は JSPS 科研費 24520406 の助成を受けた研究の成果の一部である）

【註記】

(1) 本稿は、金沢篇 [2012a] の続稿ないし補遺である。

(2) 金沢 [2012a] の《誤植訂正表》

	<誤>	<正>
259 頁註	[註記番号] 77	7
265 頁 24 行	文豪というて	文豪ということで
266 頁註 18	踏まえのもの	踏まえてのもの
266 頁註 18	Bibliograpfy	Bibliography
270 頁 20 行	明治 12 [1989] 年の	明治 22 [1889] 年の
272 頁 5 行	A RQUEST,	A REQUEST,
272 頁 29 行	1889 {明治 22} 年	1889 [明治 22] 年
273 頁 10 行	アーノルド歓迎	アーノルドを歓迎
274 頁 7 行	日本人には	日本人は
275 頁 20 行	選らんだ英詩	選んだ英詩
280 頁 17, 23 行	Arnold [1890]	Arnold [1890a]
285 頁註 37: 6 行	本文中で	本稿註 2 で
286 頁註 43: 5, 6 行	八寒本の詩集	八卷本の詩集
291 頁 18 行	[1900]: 著『佛教のすすめ』	[1899]: 著『佛教のすゝめ』

(3) アーノルドの『アジアの光』の邦訳のタイトルとして『大聖釋尊』や『大聖釋迦牟尼佛』などが用いられるようになったのには、例えば『大聖釈迦』というタイトルを持つ加藤熊一郎 [1891] などの出現が関係しているかも知れない。同書巻頭の「明治二十四年八月下旬／中西生識」と称する友人の「序」の中に、「畏友加藤君頃日螢雪ノ寸暇ヲ儉ニテ教主釋迦世尊カ偉大ナル功績ヲ綴リ一小冊ヲ著ハセリ、輕妙ノ筆、流暢ノ文、寓スルニ君カ所説ヲ以テセリ、而シテ著者自ヲ教主ヲ以テ世界ノ光、否三世ノ光トナセリ、嗚呼挺然トシテ雲際ニ聳ユルノ靈峰モ以テ其德ノ、高キヲ、比スルニ足ラス、滔々トシテ天ヲ浸スノ巨海モ以テ其德ノ深キヲ比スルニ足ラス、茫々タル天地億載、皆佛光ヲ仰カサルハナシ、著者茲ニ於テカ詩人「アーノルド」氏ヲ駕シテ其德ヲ顯揚セント欲ス」と出る。この「序」が書かれたのは、アーノルドの一度目の来日中のことであること、さらに、この加藤熊一郎 [1891] が、その生涯に亘って膨大な数量の著作を著した、加藤咄堂のほぼ最初期の一冊であることを考えると感無量のものがある。

- (4) 金沢〔2006〕などに結実したものであるが、筆者は今の一連の論致に先立つもので、『カーマストラ』の受容史、あるいは『シャクンタラー姫』の和訳史を仕上げていたのである。
- (5) 「第壹巻」と記されているが、全8篇からなるうちの最初の2篇が収録されている。言うまでもなく、後にこれに基づいて中川・濱口・狩野〔1911〕の全和訳となる。
- (6) いちおう8篇全体の和訳であるが、原著者の「序」や、訳者による解説などを欠くいわば不完全な散文訳である。刊行されるも、私家版と言うべきか。書誌的にも話題に上らない。濱口〔1908〕に「我國にては十數年の以前、某氏の直譯本ありと聞きしが未だその書を見ざれば是非し難きも」とあるのが、本書を指すものと考えられる。
- (7) 筆者の知る限り、アーノルドの生前に、どのようなものにせよ、9巻〔以上〕から成るアーノルド詩作品〔全〕集が刊行されたことはない。
- (8) わが国のこの手の刊行物でこのエドウィン・アーノルドに項目を割いているのは、必ずしも多くはないと考えられるが、そうした中、定評有る十巻本の『望月仏教大辞典』、塚本〔1957〕の第九巻補遺Ⅰのもの（6-7頁）などは注目すべきかと思う。
- (9) 洋書刊行の慣例として、わが国の和書刊行の場合のように年月日が奥付に明記されるのとは違って、ただ刊行年しか明記されないという事情がある。叙勲や爵位授与の理由としては、ただ一回の刊行物によるものより、長年に亘る功績により、という名目の方が理屈にはなっているのではないか。ただ一回の書物刊行ならば、八巻本アーノルド詩作品集よりは、むしろ『アジアの光』刊行により、とした方がインパクトがある。それほどに、アーノルドの諸著作の中では、『アジアの光』の刊行は圧倒的なものがあるのではないか。アーノルドはたくさんの詩作品の詩人としてよりも何よりも、『アジアの光』の詩人であると考えられる。
- (10) 詳しく言うならば、最初筆者が手にしたのは、山田孝道著『佛教のすすめ』（光融館）の「昭和三年三月十日六版発行」のもので、奥付には〔初版〕に関しては、「明治三十三年八月十日印刷発行」と記載されていた。それを承けて筆者は、同書を山田〔1900〕としたのである。後に同書の初版の現物を手にするや、書名が『佛教のすすめ』であり、その奥付よりは「明治三十二年八月九日印刷・明治三十二年八月十三日発行」と知れた。このことに基づいて、同書の書名を『佛教のすすめ』とし、以後山田〔1899〕と呼ぶこととした。因みに、その初版には、六版には欠如している「東京麻布筈町／曹洞宗高等中学林にて／明治三十二年七月／山田孝道識す」と署名された「緒言」が付されている。
- (11) 正木〔2001〕1352頁。
- (12) 金沢〔2012a〕257頁脚註6参照のこと。
- (13) エドウィン・アーノルドの「知己」を僭称する山田孝道は、エドウィン・アーノルドが「佛教篤信者」とであると言う。確かに佛教の創始者である釈尊の生涯を長編詩『アジアの光』に仕立てたのは事実であるが、果たして「佛教篤信者」とまで言い得るだろうか。金沢〔2012a〕274頁参照。
- (14) このArnold〔1887/1892〕は本文60頁ほどの小著であるが、その扉の表題の下にはReprinted from the "Fortnightly Review"…と記載されていることからわかる通り、初出

は雑誌に掲載された記事である。

- (15) アーノルドの講演の訳者たる外山義文については「シャム公使館の領事」を勤めたことだけを記し、詳細については別稿を期す。
- (16) 引用元の中川・濱口・狩野 [1911] では、「事もなく」ではなく、「事しなく」となっている。
- (17) 中川・濱口・狩野 [1911] 331-332 [頁] 参照。引用元では、読点はいいられていない。仮名遣いや漢字の使用法などにも改変がある。
- (18) 常光 [1969] 「加藤咄堂」の項目には以下のようにある。

「この年 [= 明治 24 年 / 1891 年 : 筆者註] の九月に『大聖釈迦』という処女出版を自費で試みた。そうこうしているうちに、麻布の曹洞宗中学林、芝の浄土宗支校の教師の口が決まり、一方において、護法書院を設立して出版を計画し、『仏教概論』・『日本仏教史』を出版し、押しも押されもせぬ一家をなすに至った。」
(90 頁)
- (19) 本書には、初出の講談社ノベルス版（1996 年刊）と、4 冊本の講談社分冊文庫版（2005 年刊）という異本が存在する。
- (20) 国会図書館より PDF 化されて公開されている書物の奥付には、「明治 25 年 7 月 12 日発行」と印刷されているが、12 が 13 に訂正されて訂正印が押されているように見えるので、取り敢えず「13 日発行」としておきたい。
- (21) 駒澤大学図書館所蔵の本書の奥付には、「明治二十四年十二月廿日発行」と印刷されているが、国会図書館のデジタルライブラリーには、毛筆手書きで修正が加えられており、その結果「明治二十五年一月二十八日発行」と読める。ここでは印刷された当初のものを採用しておく。